

地域づくりと地域集団

～京都府美山町を事例として～

林 貴彦

はじめに

今日、村づくりや町おこしの名で呼ばれる地域づくりが、私たちの国のいたるところで盛んとなっている。かつての活力を失った地域社会では、人々が「何とか活気を取り戻し、暮らしむきをよりよくしていきたい」と願い、自分たちの地域社会を見つめ直す営みを行っている。

しかしそうした地域づくりというものは、一朝一夕に実現するものではない。地域づくりという活動が、一時的で非日常的な、イベント的なものとしてではなく、地域社会の中で日常化し、ある程度のスパンをもって持続的に営まれるには、何が必要なのだろうか。

それにはやはり、地域社会の人々によって何らかの集団¹⁾が組織される必要があるのではないだろうか。また、地域社会の総意として実現されるためには、そこに暮らす人々全員の参加も要請される。そうすることによって、活動が息長く続けられるのではないだろうか。

それでは一体、そうした集団はどのように形成されるのだろうか。魔法のように、忽然と地域社会の中に形成されるのだろうか。いや、そうではないはずである。やはり、従来から地域社会に存在する諸集団が基盤となり、それらと関係を取りながら事は進むはずである。そうした地域諸集団の原理をふまえながら、いかにして地域づくりが進むのか。本稿では、京都府美山町で進行している地域づくりを具体例にあげて、地域集団のあり様を考察してみたいと思う。

1 地域集団の諸類型

地域づくりを展開していく上で、ベースとなる地域諸集団をまず検討してみよう。菊池美代志は、「生活基盤としての地域社会が崩壊してゆくなかで、地域集団の重要性が再評価されつつある」²⁾ とし、生活組織として機能する集団を次の5つに分類している。

- ① 包括的集団。町内会・自治会など。
- ② 年齢階梯集団。子ども会・青年会・婦人会・老人会など。
- ③ 職能集団。商店会・経営者クラブなど。
- ④ 行政協力集団。納税組合・防犯協会・消防組合など。
- ⑤ ヴォランティアな集団。サークル・グループなど。

そして菊池は、①～④までを「既成集団」とし、⑤を新集団として区別している³⁾。以下、これら2つのカテゴリーの特徴を見てみよう。

(1) 既成集団と伝統的集団

菊池によれば、既成集団はそれぞれの機能的側面を取り上げれば各々異なるけれども、組織形態としては互いに共通性と関連性をもつ、という。そして、その特徴として次のようなものをあげている⁴⁾。

- 1 フォーマルな集団であり、永続性が強い。
- 2 世帯単位の加入制をとり、全戸加入が原則となる。
- 3 様々な社会層を単位に組織されるので多様な要求に応えられる。
- 4 構成上の特徴から見ると、①の町内会・自治会が母胎となり、②～④はその子供のような存在である。

こうした特徴を既成集団はもつのであるが、筆者はこれらの基盤になっているものとして、「伝統的集団」というものを付け加えたいと思う。特に村落社会などの場合では、包括的な集団としての自治会や部落会のベースに、歴史的・伝統的な集団の存在を指摘出来るところも少なくない。中野卓は「現実の村は過去のその村の連続としての面をもつ歴史的な現実の村であり」⁵⁾、「その村の内外に生じた変化に対処して、それが先行する各時代時期にもっていた構造機能を不断に再組織してきた」⁶⁾ と述べている。現実到现在存在している既成集団

は、伝統的な社会構造を反映した集団に規定される側面をもっている。第1の特徴としての「永続性」は、こうしたところにその裏付けがある。

さて、伝統的集団と一口に言っても様々なものがあるが、その中でも特に村落社会の構造を解明する鍵とされてきたのが、同族集団⁷⁾である。同族集団が今日もなお、一定程度の力をもって地域社会に残存している背景には、同族集団が持つ山や土地などの共有地の存在が大きいといえる。そうしたものの維持・管理や財産の分配などを通した、家々の関係が保持されているからである。

伝統的集団が既成集団の基盤になっていると見る理由には、そうしたものの他に、その構成原理上の特徴があげられる。すなわち、その構成単位が「家」ないしは「世帯」であることである。これは菊池が既成集団の第2の特徴としたものである。例えば何か会合がある場合、その世帯を代表して誰か一人が出ればいいのであり、世帯のメンバーで都合のつく人が会合や清掃などに出ればよい。鳥越皓之はこれを「生活単位」と呼んでいる⁸⁾。家から誰かが代表して一人が出ることにより、地域社会の総意としての既成集団が成立するのである。

既成集団の特徴は、全体の総意と持続性を確保している面にあり、それは伝統的な地域集団の原理に依拠しているのである。そして、青年会や老人会などの年齢階梯的な集団や、各種組合などの職能集団を統括して、各層の多様な要求に応えられるようなしくみをもっている。

(2) 新集団

これら既成集団に対して、新集団であるヴォランタリーな集団は「利害・関心単位で組織された単一機能を持つ点、任意加入の点で既成集団と区別される」⁹⁾ものと位置づけられる。地域社会の総意にもとづいて形成されたものではない場合が多く、場合によっては、メンバーが地域社会内部にとどまらず、他の地域からの参加もありうる。「親睦や趣味をテーマに成立した小グループ的性格のものが多く含まれ、成立も一時的なことが多いから、既成集団に代替してどれだけ機能しうるか不安がある」¹⁰⁾と菊池は言う。

新集団の多くはその構成単位が個人にあり、個人の自意識に基づくものとして賛美される傾向もある。また、地域の中に何らかのアクションをおこし、次の行動を生む契機になる可能性を秘めているとも言える。しかしそのせいで、

既成集団からは排他的な存在として、地域社会の中でコンフリクトを起こす可能性もある。

(3) 地域づくり集団と地域集団

さて、このように地域づくりのベースとなる地域諸集団を整理したところで、次に地域づくりを遂行していく集団・組織は、こうした地域諸集団と一体どのような関係をもちながら形成されていくのだろうか。

これに関して奥田道大は、これまでの地域づくりに関する論点を整理して、以下の3点を指摘している¹¹⁾。第1に町内会に代表される、従来からある組織、ここでいう既成集団の評価である。第2に、個別テーマを追求する新集団を地域づくりの中にどう活かすか、である。第3にそうした地域諸集団を媒介しつつ、包括的で持続的な組織をどう実現出来るか、ということに関する論点である。

つまり地域社会に既存する、あるいは形成される諸集団を援用しながら、いかにして持続的かつ包括的な地域づくり集団の形成を実現出来るかに、最終的な論点があると言えよう。既成集団は、市町村などの行政機構との連携を可能にし、新集団は他の地域社会に住む人々との連携を視野にいれている。こうした既成集団と新集団のそれぞれの特徴をふまえながら、地域づくりを遂行する集団をどのようにして具体化していくのか。次節以降では、具体的な地域づくりの事例からそれを見ていくことにしよう。

2 美山町と地域づくりの概略

(1) 美山町の概略

美山町は、京都府のほぼ中央部に位置する山間の町である。町のほとんどを山林が占めるために(図1)、もともと農業基盤は弱く、経営耕地規模別に農家を見ると、1.0ヘクタール未満の農家が伝統的に最も多い(図2)。そうした部分をおぎなうために、豊富な山林資源をいかした多様な仕事が営まれてきた(図3)。しかし高度経済成長を経て、町の人口は半減し(図4)、今日では人口の中心も若年層から高齢層に移行している(図5)。

ここで取り上げるK地区は、平成6年10月現在で世帯数44、人口121人(男

図1 美山町総土地面積に占める林野と耕地

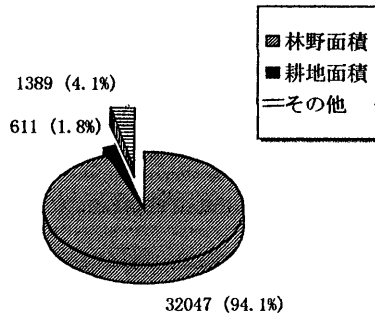


図2 経営耕地規模別農家の推移

出典：農業センサス各年10月1日現在

年次	総数	例外規定	0.3ha未満	0.3～0.5	0.5～1.0	1.0～1.5	1.5～2.0	2.0～2.5	2.5～3.0	3.0以上
1960	1504	0	278	419	772	34	1	0	0	0
1965	1389	0	218	434	695	35	6	1	0	0
1970	1319	0	241	427	594	44	9	2	1	1
1975	1181	0	263	432	444	33	5	2	1	1
1980	1143	0	290	415	400	23	6	5	0	
1985	1091	1	313	374	365	23	6	4	3	2
1990	948	1	268	328	303	27	7	5	3	5

注) 例外規定とは経営耕地規模が30アール未満で、調査日前1年間の農産物販売金額が50万円以上あった農家をさす

図3 明治20年頃の旧村の生業と物産品

旧村名	農業以外の生業	物産品
知井	炭焼, 杣職, 運送	材木, 炭, 麻糸
平屋	林業(炭焼), 養蚕, タンス製造	材木, 炭, 茶, 家具, 繭
宮島	養蚕, 製茶, 炭焼, 杣職, 荷持, 川漁, 山獺	茶, 薪炭, 繭, 麻糸, 鮎, 鱒, 鰻
鶴ヶ岡	山稼ぎ, 杣職, 労力, 養蚕	煙草, 繭, 麻布, 材木, 炭
大野	製茶, 炭焼, 杣職, 荷持, 川漁, 山獺	

図4 美山町の人口の推移（国勢調査）

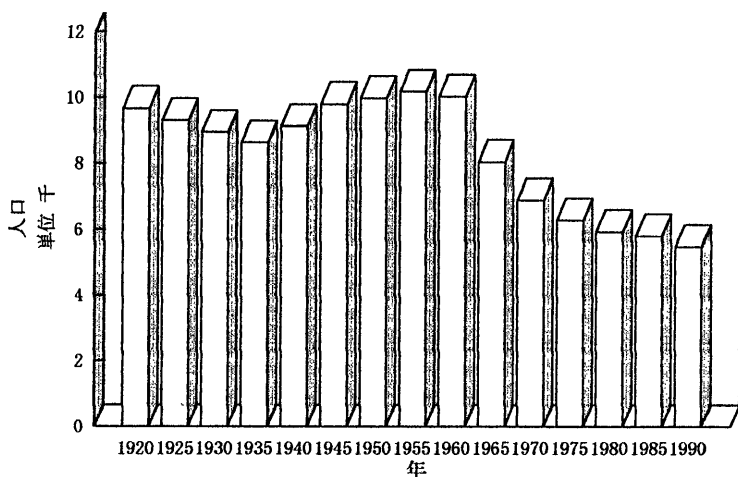


図5 美山町人口ピラミッド（国勢調査）

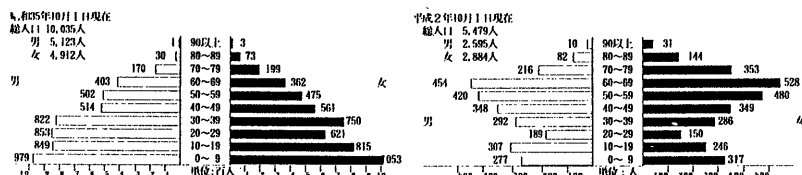
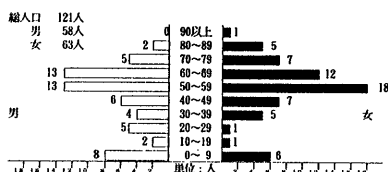
図6 北地区人口ピラミッド：
平成6年10月1日現在

図7 K地区20以上の職業構成

職 種	男性	女性	計
農 業	7	4	11
山林労務	5	0	5
公 務 員	6	4	10
自 営 業	9	4	13
会 社 員	11	3	14
農協職員	2	0	2
天理教会	1	0	1
技 術 職	4	0	4
無 職	3	41	44
	48	56	104

58人・女63人)の地区である。人口の構成を見てみると(図6), 50・60代が最も多く、全体の63%を占める。相対的に30代未満は19%と少なく、町の人口の状況を反映したものとなっている。20歳以上の職業構成を見ると、自営業や会社員が目につく(図7)。

(2) 美山町の地域づくり

とりたてて産業もなく、人口も流出して活気のない美山町では、最近まで明るい話題は少なかった。しかし、この町には約350棟もの茅葺民家が残っており、これを見物したり写生する人たちが増える昭和60年頃から状況は変わってきた。茅葺民家が構成する山里の風景が「日本のふるさと」や「日本の原風景」のイメージとされ、マスコミにも取り上げられるなどして、今まで人気のなかった村々に訪れる人が急増したのである。特に、ここで取り上げるK地区には44軒ある家のうち、半数近くの18棟が茅葺屋根をのせており、こうした家々が雛壇のように並んで独特の景観を構成していたことから、来訪者の数は多くなる一方であった。

昭和63年に、美山町が国土庁主催の「第3回農村アメニティコンクール」において優秀賞に輝くと、美山の茅葺民家、特にK地区の独特の景観が全国的な注目を浴びるようになる。町議会や役場ではこれを受け、茅葺民家を文化財として保存していこうという動きが高まり、条例が作られることになった。具体的には、文化財保護法の規定にもとづき、茅葺民家を含む景観を「伝統的建造物群」として将来に伝えていこうとするものである¹²⁾。協議が続けられた結果、平成4年12月21日、町議会において条例第19号「美山町伝統的建造物群保存地区保存条例」が議決され、K地区の茅葺民家群が将来に渡って保存されることになった。

平成5年3月にはK地区の「かやぶき屋根建造物群」が、農林水産省の「第1回美しい日本の村景観コンテスト」で農林水産大臣賞に選ばれる。これをうけて、同年11月19日の国の文化財保護審議会答申で、K地区が国の重要伝統的建造物群に指定される。全国で36番目の指定であり、集落全体が指定の対象となったのは岐阜県の白川郷について2番目であった。

こうした条例化が進んだ一方で、茅葺民家を見学に来る来訪者の受け入れ対

策として、京都府は平成4年に、「京都府シンボルづくり事業」の一環として「茅葺山村歴史の里整備事業」の実施を決定し、K地区に施設を整備することにした。この事業が整備を行う3つの柱が「茅収納庫」,「茅葺の里拠点施設民俗資料館」,「茅葺保存センター（レストラン）」であり、総額1億200万円のプロジェクトを、府と町が半額ずつ「京都府シンボルづくり総合補助金」として受け持つことになった。事業ではこうしたハード面の整備を行うのみで、後の運営といったソフトな面は全てK地区に委託されることになった。

こうしてK地区の人々は、茅葺民家を守り、来訪者を受け入れて、諸施設を運営しながら地域づくりを行っていくことになったのである。

3 K地区における地域集団

地域づくりは、K地区の中の地域集団とどのように関係し、進展していったのだろうか。それを検討する前に、ここではまずK地区の地域諸集団を概観しよう。

(1) 伝統的集団

K地区の歴史をひもとくと、「苗（ミョウ）」と呼ばれる同族集団の存在を指摘することが出来る。柳田國男によると「苗は同族の集まりで、苗毎に各々の氏神を祀り、苗の神に属する苗山もある。同苗の家々は毎年一度の集會をする。之を苗講と稱し、苗講には一人のミヤウオヤ（苗親）がある。苗親は講の寄合ひに上席に坐り、又苗山の管理に任ずる。株といふのは此地方では苗の下小さな集團の名である」¹³⁾ という。今日では苗を知る資料も少なく、地誌などにはその起源を伝える伝承が残されている程度である¹⁴⁾。

K地区には26世帯からなるN苗と、9世帯からなるK苗の2つの苗がある¹⁵⁾。柳田が指摘しているように、各々の苗とも神社に祖先を祀り、苗山を管理し、苗講を行っている。「オモヤーインキョ」と呼ばれる本分家関係が見られ、苗は同じ名字をもつ家から構成されている。そのため、新たに地区内に入った人々に苗に入れる資格はない。それぞれ、N・Kの姓でなければならない。該当する35世帯は在村居住年数も長く、近世あるいはそれ以前にまで歴史は溯れるらしい。

苗は、行政協力的な自治組織が結成される以前の、村人たちの手による自治集団として、村の内外の問題を処理してきた。なお苗以外の伝統的集団としては、以前は伊勢講、愛宕講、大峰行者講などがあったが、現在では統一されて「合同講」という形になり公民館行事となっている。

(2) 既成集団

K地区の既成集団を、菊池の類型によって分類すると、以下のようになる。

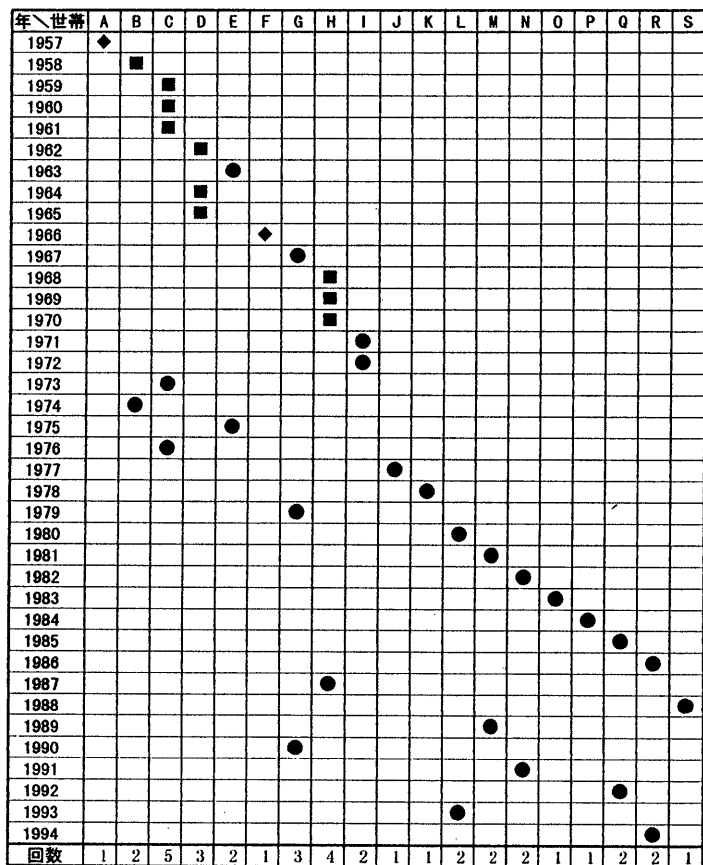
- ① 包括的集団としてのK公民館，K財産区。
- ② 年齢階梯集団としての青年会，婦人会，老人クラブ。
- ③ 職能集団としての農事組合。
- ④ 行政協力集団としての消防団。

菊池が指摘したように、K地区でも包括的集団としての公民館が上位集団となり、その他の集団がこれに統括される下位集団となっている。ここでは、公民館と財産区を中心にみることにしよう。

公民館は、全戸加入が原則となっている。従来から居住している所謂地付きの者だけではなく、新参者を含めて全戸が加入している。会費は月額1,200円。区長・副区長・会計が三役と呼ばれ、任期は1年である。年に1度選挙がなされ、改選される。なおK地区では副制がとられており、副区長に選ばれた者が翌年の区長に就任することになっている。そのため、同じ人物が2年連続で区長になることはない。ただし複選の妨げはないため、区長をつとめた翌年に副区長をすることは可能である。図8に、戦後の歴代の区長をあげた。現在では副制が厳守されているが、過去には曖昧な面が多く、多い者では3年連続でつとめた者もいる。

ここで確認しなければならないのが、こうした集団を構成する単位が家ないしは世帯にあるという点である。区長に選ばれるのはあくまで〇〇や××という個人そのものであるが、この図で整理したように時系列的に区長の名前を挙げていくと、それは同一の家ないしは世帯から選出されている。つまり「あの人に」ではなく、「あの家の人に」というのが選択の基準になっているのである。区長は44世帯のうち、17世帯がもちまわっている。戸数が少ないこともあるが、区長になる家というものはある程度決まっている。地域を動かしていく

図8 K地区歴代区長



- =現世帯主
 ■=前世帯主
 ◆=現在は転出

家というのは、やはりある程度地域からの信頼を得られていないといけない。新参者から未だかつて選ばれたことは一度もないという。ここには苗という伝統的集団の中で培われてきた「家の信用」というものが作用しているのではないだろうか。

財産区は、K公民館をサポートするものとして位置付けられている。K地区には苗山とは別に「村山」と呼ばれる、地付きの者だけでも300ヘクタール

の共有林が存在する。この管理をするのが財産区であり、利益の一部が公民館に出される。なお新参者にはこの権利は認められていない。財産区にも役員がいて、管理委員長と会計の2つの役職がおかれていて、任期が2年となっている。K地区に公民館が設置される以前は、こうした共有林を中心にして、村の政治や生活が営まれていた。その慣行が今も残り村落の解体を防いで来たのだが、公民館組織はより包括的な集団として、共有林の権利をもたない人々をも抱き込む形で設定されているといえよう。

(3) 新集団

K地区では、地区全体での地域づくりが始まる前から自発的な活動を行っているグループもある。このグループは、自分たちで作った農作物を加工・販売し、主に女性たちが中心となって取り組んでいるところに大きな特徴がある。

K地区の茅葺民家が全国的に注目を集め出して来訪者が増えて来ると、村の女性たちの間で「何かお土産ものでも作るといいのではないだろうか」という話が出始める。毎月1回、婦人会の会合がK地区で開かれるのだが、その場で話をもちかけると賛同がえられたので、平成2年から婦人会全員での取り組みがスタートすることになった。最初は暗中模索で、栽培も加工もままならなかったが、1年を経過する頃にはようやく要領を得るようになった。だがその頃になると、婦人会の中には、自分の生活を考えて「あまり深く関わっては」という消極的な人たちも出てきたため、自発的にやりたいと思う者だけで平成3年、グループを誕生させることになった。

このグループには、妻が参加している様子を見て賛同した男性が4名加わり、女性9名とあわせて13名で構成されている。公民館の一角を借りて加工品を販売するほか、郵便局や農協の人たちと連携をとって「ふるさと直行便」というギフト・パックを作り、広く都市の消費者に向けてのアピールも行っている。

4 K地区における地域づくりと地域集団

(1) 地域づくり集団の形成

以上のような集団をベースとして、K地区では地域づくりを遂行していく集団が形成されていく。さて先にふれた京都府シンボルづくり事業では、資料館

図9 K保存会規約

先人が育み、残してくれた偉大なる遺産は、日本農村の原風景として、今まさに広く脚光を浴びるに至った。全住民が、この価値を等しく認識し、英知を結集して、シンボルづくり事業と、予定されている伝建選定によって、造られ整備されていくこのかやぶきの里を守っていききたいものである。

(名称)

第1条 本会はK保存会と称し、会の事務局を集落センターに置く。

(会員)

第2条 本会は、K公民館員をもって構成する。

(目的)

第3条 本会は、茅葺山村歴史の里として、訪れる来訪者にやすらぎと感銘を与える方策と、ふるさと産品の創出等により、所得の向上に資するための研究・協議・実践をすることと、かやぶきの里を守り後世に継承することを目的とする。

(事業)

第4条 本会は、目的を達成するために次の事業を行う。

- 1, 民俗資料館の運営に関すること。
- 2, 茅収納庫の運営に関すること。
- 3, 集落保存センターの建築と運営に関すること。
- 4, 伝統的建造物集落群指定に関すること。
- 5, 環境整備に関すること。
- 6, 防火対策に関すること。
- 7, ふるさと産品の創出に関すること。
- 8, 会員に学習の場を提供すること。
- 9, 行政並びに町内関係団体、他集落と連携すること。
- 10, その他、目的達成に必要と認めること。

(役員)

第5条 本会の役員並びに任務は、次のとおりとする。

- 1, 会 長 (1名) 本会を代表し、会務を統括する。
- 2, 副会長 (2名) 会長を補佐し、会長に事故あるときはその職務を代行する。(内1名は区長)
- 3, 庶 務 (1名) 会の事務を行う。
- 4, 会 計 (1名) 会の会計事務を行う。

第6条 役員の任務は1年とする。ただし、再任は妨げない。

第7条 役員に欠員が生じたときは、これを補充する。任期は前任者の残任期間とする。

(総会)

第8条 総会は、公民館総会をもって充てる。

第9条 総会は、次のことを審議決定する。

- 1, 本会の規約制定改廃
- 2, 組織の変更
- 3, 役員の選出
- 4, 事業・会計の審議・承
- 5, その他

(各種委員会)

第10条 本会は、次の委員会を置く。

- 1, 運営委員会
- 2, 常任委員会

第11条 運営委員会の構成及び任務は、次のとおりとする。

- 1, 運営委員会は、会長、副会長、庶務、会計及び総会で選出された委員10名で構成する。
- 2, 運営委員の任務は、本会の運営・事業を企画立案する。

第12条 常任委員会の構成及び任務は、次のとおりとする。

- 1, 常任委員会は、会長、副会長、庶務、会計及び運営委員の中から選出された2名で構成する。
- 2, 常任委員会の任務は、運営委員会並びに公民館総会において決定された事項につき、具体的な協議・執行をしたり、緊急を要する事項の処理をする。

(各種部会)

第13条 本会に、次の部会を置く。

- 1, 民俗資料館部会
- 2, 集落保存センター部会
- 3, 茅葺屋根保存センター部会
- 4, ふるさと産品部会
- 5, 町並み保存部会 (伝建部会)
- 6, その他、志を同じにする者をもって構成する部会

第14条 部会は、総会において事業の収支報告をする。

(会計)

第15条 本会の経費は、区の助成金・貸し付け金及び寄付金をもって充てる。

第16条 本会の会計年度は、毎年4月1日にはじまり、翌年3月31日をもって終わる。

(附則)

第17条 本規約は、平成5年4月25日より施行する。

や茅の収納庫、食堂といった施設が整備されたのだが、後の運営面は全てK地区の人たちに委ねられることになった。そこでK地区では、今まで自発的に活動してきたグループの人たちを含め、地区全体の総意として活動をおこなうために、新たに「保存会」という名前で地域づくりを行う集団を作ることになった。

それにあたって、従来から地区に存在する包括的集団であるK公民館の総会で協議がなされた結果、図9にあげるような規約が完成した。保存会の特徴をここから見てみることにしよう。

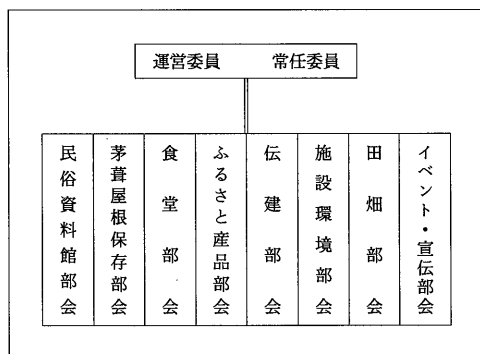
規約第2条に「本会は、K公民館員をもって構成する」とあるように、構成単位を世帯とする既成集団の構成原理を踏襲し、全戸参加とすることで地区全

体の総意として地域づくりを行っていく方針を打ち出している。

先に見たように、K地区には区長をはじめとする役員が選任されているが、この保存会でも既成集団とは別に役員が設けられている。会長1名、副会長2名、庶務1名、会計1名の計5名となっている。そして運営委員会と常任委員会という2つの委員会を設けており、これらに選ばれた委員たちが、実際の地域づくりを推進する上での企画や事務的事項などを協議し、地域の人々をリードしていくことになっている。どちらの委員にも、役員5名は自動的に入ることになっており、その他のメンバーは「総会で選出された」者が当たることになっている。

図10 保存会のイメージ図

保存会＝K公民館



保存会には、シンボル事業で整備された資料館や食堂、茅の管理などを運営していく部会が設けられている。ここには役員が分散して入り、地域の人々が公募によって加入し、平成5年4月から運営が行われることになった。図式化してみるならば、保存会は図10のような形になっている。

(2) 地域づくりと地域集団

既成・新規の地域集団は、保存会にどの程度反映されているのだろうか。まず、保存会の役員及び委員会の人たちが既成集団の役職とどのようにリンクしているか、見ることにしよう。

保存会の役員5名は既成集団の役員とは別に選ばれるが、副会長のうち1名は、規約に基づいてK地区の区長が兼任することになっている。役員構成の面では、既成集団を率いる長との関係が作られている。そして保存会の委員であるが、規約では選出方法などが明らかにはなっていなかった。が、実際にはK地区の既成諸集団と、保存会の各部会から委員を送り出す形が取られた。ここ

までの役員と委員会の構成を図11に示してみよう。役員には区長が入り、委員

図11 保存会の役員と委員の構成

		出 自			
運 営 委 員	常 任 委 員	保存センター部会代表	保 存 会 長	役 員	
		民俗資料館部会代表	保存会副会長		
		K 区 長	保存会副会長		
			保 存 会 庶 務		
			保 存 会 会 計		
	委 員	伝 建 部 会 代 表			
		茅葺屋根保存会部会代表			
		農 業 組 合 代 表			
		ふるさと産品部会代表			
		美山町村おこし推進委員			
		K 財 産 区 委 員			
		K 老 人 ク ラ ブ 代 表			
		K 青 年 会 代 表			
		K 公 民 館 役 員			
グ ル ー プ 代 表					
農 協 婦 人 部					
婦 人 会 K 支 部 長					

会には青年会や老人クラブなど年齢階梯的側面をもつ集団や、婦人会、さらには農事組合等からメンバーを選ぶことによって、多様な層の意見を探り入れることを目論んでいる。また地域づくり集団である保存会の各部会からの意見も集約出来るようなしくみになっている。

次に、こうした役員や委員に選ばれる人たちというのは、既成集団の中でどのようなポジションを占める人たちなのだろうか。ここではその指標の1つとして、K地

図12 委員を出す世帯と区長の経験

経験回数		出 自			
2 回	運 営 委 員	常 任 委 員	保存センター部会代表	保 存 会 長	役 員
2 回			民俗資料館部会代表	保存会副会長	
2 回			K 区 長	保存会副会長	
4 回				保 存 会 庶 務	
2 回*				保 存 会 会 計	
2 回*					
			伝 建 部 会 代 表		
			茅葺屋根保存会部会代表		
5 回			農 業 組 合 代 表		
			ふるさと産品部会代表		
1 回		委 員		美山町村おこし推進委員	
3 回				K 財 産 区 委 員	
			K 老 人 ク ラ ブ 代 表		
			K 青 年 会 代 表 #		
			K 公 民 館 役 員		
2 回			グ ル ー プ 代 表		
1 回			農 協 婦 人 部		
		婦 人 会 K 支 部 長 #			
計10世帯					

注) *と#の印は、それぞれ同一の世帯

区の区長をつとめたことのある世帯との相関を見てみることにしよう。

役員と委員は全部で17人、世帯でいうと15世帯ということになるのだが、このうち10世帯が区長を経験している（図12）。区長を経験した世帯というのは、全44世帯中17世帯だから、保存会の役員と委員に選ばれる人たちは、既成集団の中で指導的立場にあった人が多い。役員だけで見れば、全て

の者が区長を出したことがある世帯から選ばれている。

さて、新集団であるボランティアなグループを保存会にどう位置づけるかは、かなり問題となるところであった。全く本意ではなかったにしろ、結果として一部の人だけに利益がおちることになったからである。しかし、保存会は既成集団を基盤とし、構成単位を世帯として全世帯加入を基本としたことから、グループの人たちも保存会の一員であることにはかわりないのである。そういうことから、グループの人たちは一緒に活動していくべきだと考えて、土産物などを販売したり加工したりする部会の1つに加わることになった。

先にあげた図10にあるように、保存会の委員には、各部会を代表して誰かが選ばれており、グループの場合も代表者が委員に参加している。またグループをやりつつも、他の部会に参加している人もいる(図13)。

地域づくりを遂行していくには、何かと費用がかかる。保存会の運営金は、現在のところ委託金、補助金、分担金、寄付金の四種類のお金で賄われているが、この出所を見てみると、行政や既成集団との関係が明らかになる。

まず委託金は、保存会が資料館などの諸設備を町からの委託を受けて運営している形になっているため、町から年間100万円のお金が入ってくる。もっと

図13 グループと保存会

成員	性別	委 員		保 存 会 へ の 参 加							
		常任	運営	資料館	茅葺	食堂	産品	伝建	施設	田畑	宣伝
1	女		○				○				
2	女										
3	男		○								
4	男				○	○			○		
5	男										
6	女				○	○					
7	女				○						
8	女										
9	男										
10	女						○				
11	女		○							○	
12	女										
13	女			○							
		0	3	1	3	2	2	0	1	1	0

も、諸設備の維持管理や保険金などで、最初から100万円は必要経費として消えてしまうそうである。

補助金は、先にあげたK地区の地付きの者だけで所有する共有林が生み出す収入の中から、年間50万円が出されている。

分担金は、資料館や食堂、それにグループからそれぞれがあげた利益の一部を地域づくり集団に負担している。

その他に、駐車場や資料館などの諸施設には募金箱もおかれており、茅葺民家の保存に賛同する来訪者から、年間10万円ほどの募金があるという。

こうして行政及び地域の既成集団からの補助と、自らが産出する利益とをあわせて、保存会は運営されている。

(3) 地域づくり集団への参加

このように地域づくり集団が形成されたのであるが、その参加の状況を図14にまとめたので見てみよう。

これによると全44世帯中、35世帯が参加しており、全体の約8割が関わっていることになる。K地区にある全世帯が保存会員なのであるが、現時点では全ての世帯からの参加が得られているとはいえない状況である。

世帯を構成単位としていることから、人数でいえば121人中、59人の参加となっており、5割をきってしまう。「誰が参加しているのか」ではなく、「どの家が参加しているのか」ということが、参加の程度を見る上でも大事になってくる。

しかし、保存会には世帯から誰かが出てはいるものの、活動自体は個々人が部会に参加して行うという面が強い。このため全世帯からの参加が得られた後は、どれだけ多くの人数を動員できるかが課題となってくるだろう。現時点で見てみると（図15）、地域に存在する各種の既成集団を地域づくり集団にリンクさせたことから、性別でいっても男性36名、女性23名と、比較的偏りは少なく参加が得られている。また世代的に見ると、地区の人口構成を反映して50代が13名、60代が19名と最も多いが、その次には30代の7名、20代の6名が多く、比較的若い世代の参加も実現している。

こうしてK地区では既成集団と新集団との関係を保ち、保存会だけが浮き上

図14 地域づくりへの参加

世帯	性別	年齢	委 員			部会への参加						グループ への参加	
			常任	運営	資料	茅葺	食堂	産品	伝建	施設	田畑		宣伝
1	男	40		○			○				○		
	女	60					○						
2	女	70				○							○
3	男	50	○	○		○	○			○			
	男	20					○						
4	男	80				○							
5	男	60	○	○	○	○	○		○	○			
	女	60					○						
	男	20					○						
6	男	60					○						
7	男	50	○	○		○				○			
8	男	20					○						
9	男	60	○	○	○	○	○		○		○		
	女	60			○								
	男	40	○	○			○					○	
10	男	50		○		○	○			○			○
	男	30					○			○			
11	男	60	○	○			○				○		
	女	60			○								
12	男	50						○					○
13	女	60			○								
14	男	50				○							
	女	50		○			○			○			
	男	20		○			○					○	
15	男	60				○							
16	女	50				○	○						
	男	30					○						
17	男	70				○							
18	女	50		○			○					○	
	女	30					○						
19	男	50	○	○			○			○			
20	女	60		○							○		○
	男	30					○						
21	男	60				○	○						○
	女	60		○				○					○
22	男	60	○	○		○	○			○			
23	女	70				○							
24	男	50							○				
25	女	50			○								○
	男	20					○						
26	男	60					○						
27	男	70		○							○		
28	女	60					○						
	男	20					○						
29	男	50						○					
30	男	30	○	○			○	○					
	女	30					○						
	女	60			○								
31	男	50				○							
32	男	70				○							
33	男	40						○					
	女	30					○						
			9	17	7	17	32	5	4	7	5	3	7

図15 保存会への世代別参加状況

	～29	30～39	40～49	50～59	60～69	70～79	80～89	計	割合
男	6	4	3	9	9	3	1	35	66%
女	0	3	0	4	9	2	0	18	34%
計	6	7	3	13	18	5	1	53	100%
割合	11%	13%	6%	25%	34%	9%	2%		

がることのないようにして、地域づくりが遂行されている。

おわりに

「地域社会は解体した」という表現がよくなされるけれども、私は決してそうではないと思っている。本稿で取り上げた美山町の事例だけでそう言い切れるものではないが、これだけ地域づくりが各地で行われているのならば、地域社会が全く解体していてそこに何の営為の発芽も認められないとした場合に、一体地域づくりは何に依拠して行われるのだろうか。そこに私は大変な疑問を感じてしまう。地域社会が解体して何もないのならば、リゾート開発などはもっと成功しても良かったはずであるが、現実にはうまくいかなかった¹⁰⁾。

それぞれの地域社会は、それぞれ固有の歴史をもっているのであり、そうした背景をもって地域集団は存在している。地域社会では、既成集団が持続しながらも、外部社会からの影響や、内部から新集団が形成されることによって刺激を受け、次のステップとしての包括的な地域づくり集団が形成されていく。そうして地域づくり集団が、その地域社会の歴史に新しいページを刻んでいくのではないだろうか。

註釈

- 1) 集団の定義は、以下のものを参照しておく。集団とは「特定の共同目標をかけた、多少とも共属感をもち、相互作用を行っている複数の人々の社会的結合」である（見田宗介他編『社会学事典』弘文堂、1988年、439頁）。
- 2) 菊池美代志「地域集団」高橋勇悦編『テキストブック社会学(5) 地域社会』有斐閣、1977年、40頁。
- 3) 菊池、前掲論文、41頁。

- 4) 菊池, 前掲論文, 41頁。
- 5) 中野卓「村落社会の一研究方法」『村落社会研究』第8集, 塙書房, 1972年, 122頁。
- 6) 中野, 前掲論文, 131頁。
- 7) 鳥越皓之によれば, 「同族とは本家と分家によって構成される家々のまとまりを意味」し, 「一軒の本家を中心にして数軒の分家から同族はなりたっているが, この同族家相互のあいだに, 一定ていど秩序化された相互作用が維持されていれば, それを同族組織とよんでよい」という(鳥越皓之『家と村の社会学』世界思想社, 1985年, 48~49頁)。
- 8) 鳥越皓之『地域自治会の研究』ミネルヴァ書房, 1994年, 6~7頁。
- 9) 菊池, 前掲論文, 42頁。
- 10) 菊池, 前掲論文, 42頁。
- 11) 奥田道大「コミュニティ生活の創造」同他編『コミュニティの社会設計』有斐閣, 1982年, 58~60頁。
- 12) 昭和50年7月に文化財保護法が改正されて, 「伝統的建造物群」が新たに文化財のカテゴリーに入れられた。これは「周囲の環境と一体をなして歴史的風致を形成している伝統的な建造物群で価値の高いもの」と規定されており, また同法83条の3第2項で「市町村は都市計画以外の区域においては, 条例の定めるところにより, 伝統的建造物群保存地区を定めることができる」とされている。
- 13) 柳田國男『族制語彙』日本法理研究会, 1943年, 19~20頁。
- 14) 苗の起源は, この地方のおこりを伝える, 香賀三郎兼家による猛獣退治の伝説に, 語り継がれている。元明天皇の代, 和銅6(713)年に, 丹波国北部の深山に八つの頭をもった巨大な鹿があらわれて, 災害をもたらす大変困惑させられたため, 天皇の命を受け, 香賀三郎兼家がこの鹿を退治したという。その後は「八頭巨鹿退治に成功せし従兵の中, この地に留まり家を建て、永住を計りしものあり。その裔連綿として今日に至る。これ知井十苗にして本村開拓の舊家なりといふ」とある(『北桑田郡誌』1923年, 589頁)。
- 15) K地区では, N苗がその大半を占める。全44世帯中, 26世帯が同苗を構成しており, 苗の神社を祀り, 苗山を管理している。苗親であるが, 以前は柳田の指摘どおり, オモヤの当主がほぼ世襲的に受け継ぎ, 苗代と呼ばれていた。しかしオモヤは

30年程前に当主と跡継ぎが病死したことにより没落した。

苗親が不在となったため、それ以後は5人の委員が選出され、その中から代表1名、会計と庶務を兼ねて1名の計2名が決められて運営にあたっている。

さて現在の機能としては、山の管理が主となっている。苗に入っている世帯から誰か一人が、日役と呼ばれる山仕事に決められた日に出ることが要請される。出られない場合には、手間賃を納付せねばならない。なお、土地の登記は全世帯主の連名になっている。

また年に1回、10月15日に苗講が行われる。その際に講当番と呼ばれる家が2軒選出され、御馳走などの接待を受け持つ。以前は当番の家が講の会場となっていた。現在ではこれを取りやめ、公民館を借りて形式的な会計報告と、簡単な飲食があつて終わる。かつて分家があった場合には、必ず入らねばならなかった。現在では分家はなく、新たに入る家もないが、入会金は30万円、脱退にも同様の金額が求められる。

K苗は全部で9軒と、N苗に比べて小規模な苗集団である。Kの苗親は代々本家の家がつとめており、現在でも没落することなく続いている。神社を祀り、苗山を9軒でもっているが、小規模な苗であるため山の管理が行きとどかず、現在では森林組合に管理を委託している。登記は、N苗と同じく連名になっている。苗講は戸数が少ないため、順番に当番の家をまわって行われている。

16) 佐藤誠『リゾート列島』岩波新書、1990年。

(はやしたかひこ 佛教大学大学院社会学研究科博士課程)

Reformation of neighborhood groups in a local community:

A case study of Miyama town in Kyoto Prefecture

Takahiko Hayashi

This article aims mainly at analyzing reformation of neighborhood groups in the local communities, such as Miyama town in Kyoto Prefecture.

For generations, people have lived in their local communities, here neighborhood groups have fulfilled their function for everyday life.

However, since the rapid economic changes at Japanese society in the 1960s, the center of life changed from community to the individual. Nowadays, the residents are going for a new solidarity and trying to regenerate their own local community.

Activities are organized by the neighborhood groups, that are broadly divided into the following two categories. First, there are permanent traditional groups, whose members are whole households as it was in the former community structure. Here we find relatively conservative tendencies. Second, There are less permanent, voluntary groups, which are organized to accomplish a specific purpose. Basically, their members are individuals. Sometimes they are in conflict with the other groups. However, they make it possible to have a fresh breeze blowing into the community.

By making good use of these two categories of groups, that reflect the feelings of the residents it become possible to accomplish new purposes needed in modern life. People thus are able to regenerate new neighborhood relations.

In Miyama town, people had been suffering from depopulation. However, the situation changed recently. The residents of the cities began to visit Miyama town, especially at "K" area, mainly to see the traditional "kayabuki" houses. The residents of "K" area began to discuss the welcoming of visitors. At first, a voluntary group was organized by some people there, and then a traditional group began to manage the facilities for visitors which Kyoto Prefecture and Miyama-town had built. Gradually, these two groups were integrated into a new group that regenerated social bonds among the residents of "K" area.

As a result, the people are adding a brilliant new page to the history of there own local community.